

《優秀賞》

私の中の60%の同居人

大阪府立水都国際中学校

3年

藤野ふじの 琉菜りはな

「人の体の60%は水でできている」という理科の授業の一節。それを聞いた時、私は自分の腕をまじまじと見つめてしまった。この皮膚の下には、蛇口から出たあの透明な液体がタプタプと詰まっているのだろうか。そう思うと、私という存在が急に歩く水槽のように思えてきて、なんだか可笑しくなった。でも、その水はいつたいどこから来て、私の体の一部になったのだろうか。

蛇口をひねれば当たり前に出てくる水。しかし、その一滴は気の遠くなるような旅をしてきたはずだ。数ヶ月前には雲の中にいて、雨となって山に降り、土をくぐり抜け、ダムに貯まり、浄水場で磨かれ、暗い地下の水道管を通って私の家までたどり着いた。

そんなことを考えながらコップ一杯の水を飲むと、喉を通り抜ける冷たさが、山奥の森の匂いや、都会の騒がしさを運んできたメッセージのように感じられた。私の体を作っているのは、ただの化学物質ではなく、地球を循環する旅の記憶そのものだ。

二〇一八年の大阪北部地震で私は断水を経験した。数時間、水が出ないだけで生活はパニックになった。トイレも流せない、手も洗えない。その時初めて、私は「水を使っている」のではなく「水に生かされている」のだと痛感した。同時に、鹿児島に住む祖父の田舎の川を思い出した。そこには、ただ流れているだけで周りの草木を青々とさせ、魚を育て、人々の田んぼを育てる無償の優しさがあつた。水は何も言わない。けれど、形を変え、場所を変え、常に誰かのために働いている。私の体の中にいる60%の水も、今この瞬間、私の体温を調節し、血を巡らせるために休まず働いてくれているのだ。

「水の日」という言葉があるが、私にとっては毎日が「水の日」だ。鏡を見るたび、私の中にいる60%の同居人に感謝したくなる。

世界にはこの一滴が宝石より貴重な場所がある。私が蛇口を無造作に

ひねるその一瞬に、地球の反対側の誰かの命がかかっているかもしれない。

これからは、ただ水を「使う」だけでなく私の体の一部として、そして地球を旅する仲間として大切に扱っていききたい。次に私の体から汗として出ていく水が、またどこかで誰かの役に立つような、美しい旅を続けられるように。